定価 850円 0093-772185-3041

鬼の太鼓

高橋昌男

鬼の太鼓

一九七九年三月一〇日第一刷印刷　一九七九年三月二五日第一刷発行

著者＝高橋昌男

発行者＝堀内末男

発行所＝株式会社集英社
東京都千代田区一ッ橋二〜五〜一〇　郵便番号一〇一
電話〇三―二三〇―六三六一〔出版部〕二三八―二七八一〔販売部〕

印刷所＝大文堂印刷株式会社＋錦印刷株式会社

定価＝八五〇円

著者との諒解により検印は廃止します。乱丁・落丁の本はお取り替えします。

©1979 Masao TAKAHASHI

Printed in Japan　0093――772185――3041

目次

鬼の太鼓　5
いれずみ　65
家族の休暇　117
盛装　167

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

鬼の太鼓

装画　三輪敦子

鬼の太鼓

ひさしぶりの好天に恵まれて、アパートと砂利道をへだてて向き合った栗林のなかで、雀の囀(さえず)りがかしましい。そして時たまだが、鵯(ひよどり)が喉を引き絞ってするどく啼き立てる。さきほど由香を通園バスに乗せようと表へ出たとき、加代子は隣のみどり荘の柿の木の枝に、四十雀のすがたを見ていた。頭が黒で頬と腹がくっきりと白く、薄青色の羽をもつ四十雀は、清楚な感じがして、彼女は好きだった。

雀や鵯は一年じゅう目にするが、四十雀や椋鳥が高尾山から降りてくれば、もう秋は終りである。あと十日もすれば、栗林は裸になるだろう。二百本はあるというその栗林は近在の農家のもので、錆びた有刺鉄線で囲われている。囲いのなかの道端の土手には、熊笹と競い合うように茗荷が生い茂っているが、いまはほとんど立ち枯れ寸前のありさまで、夏の頃の威勢のよさが嘘のようだ。

すでに十一月も半ばにちかい。文化の日から間もなく天気が崩れて、とくにこの二、三日というものは雨が降りづめにふった。急に吐く息が白くなり、ストーブとはいわないまでも、電気炬燵なしでは済まされなかった。それがどうだろう、今朝は一転して、雲ひとつない青空がのけぞ

るように拡がっている。陽が高くなるにつれて気温もぐんぐん上がり、たっぷり雨を吸い込んだ砂利道や、アパートの屋根の廂から水蒸気が立ち昇りはじめた。一週間以上も、薄暗い、二間しかない部屋に閉じ籠められていたせいで、水たまりに撥ね返る光、熊笹の葉に宿る雨滴のきらめきが、針を刺すように目に痛かった。

しかし、痛いのは目だけではなかった。加代子は窓の外に二重三重に洗濯物を吊るしながら、顳顬のあたりがズキズキ疼くのをおぼえた。鼻風邪でもひいたのだろうか、そういえばどことなく躰がだるい。六日ぶりに出張から戻ってきた和馬に、心ならずも、昨夜こちらからせがんで抱いて貰った報いかもしれない。和馬はそのとき仕方がないといったそぶりでしぶしぶ躰を起すと、隣の蒲団で眠っている幼い娘の耳を憚って声を潜め、「いったいどうしたんだ、無理するなよ」と嘲るようにいったが、そのひと言に仕込まれた棘に気付かぬふりをして、「やだわ。ひさしぶりで、なんだかきまりが悪い」と、しゃにむに躰を寄せて行った自分がいまはただ舌打ちせんばかりに腹立たしい。さきほど浴槽を洗った折に、ざぶざぶ躰を清めたことで、かろうじて救われている按配だ。

和馬はおそらく、妻の誘いを、離れかけた良人の気持を引き留める必死の手管と見たにちがいなかった。たしかに月々の婦人雑誌をひらけば、かならずといっていいほど、夫婦が倦怠期を乗り切るには、妻のほうに二人の夜をあれこれ演出する工夫と努力が必要だといったたぐいの記事が目に飛び込んでくる。妻を愛人か妾かなんぞのように見立てている書きっぷりには、ばかばかし過ぎて怒る気にもなれないが、和馬がもし昨夜のこちらのふるまいを、これまで由香の世話や

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

家事にかまけてあなたを顧みなかったのは悪かった、これからは心を入れ替えて、あなたの望む通りの妻になるからどうか女と別れてくれ、といったいじらしい心根のあらわれと取ったとしたら、それほど間尺に合わない話はなかった。それぐらいなら、肉欲の猛るにまかせて、大胆な所業におよんだと見られたほうがましだ。事実、一ヵ月以上も放って置かれて、躰の芯にそうしたあさましい衝動が、狐火のようにちろちろと燃えていなかったとは言い切れなかったのである。

しかし、こんなことは大げさに考えるほどのことじゃない。単に五年にわたる夫婦の習慣が尾を曳いているにすぎず、いずれ肌と肌の触れ合いがいまよりもっと間遠になって、ついに跡絶えるときがくれば、狐火は自然と掻き消えてしまうだろう。彼女はそう思った。あと何年、都心から離れたここ武蔵野のはずれに窮屈なアパート暮らしをつづけるのかわからないが、かりに二年後にそういう事態を迎えるとして、自分は三十。三十の女ざかりに肉体を閉ざしてしまうのは、われながらもったいない気がしないではないけれど、大して好きでいっしょになった相手ではない、形ばかりの夫婦として世間の目を欺きながら、由香と二人、ひっそりと生きて行くのはむしろ歓迎すべきことかもしれない。

和馬に女がいることなど、加代子は何とも思わなかった。はっきり女がいるとわかったのは、脱ぎすてた肌着のうらに、長くて細い髪の毛が一本からまっているのを見付けた二ヵ月ほど前のことだが、出張だといって頻繁に家を明けるようになった春頃から、彼女はうすうすそうではないかと疑っていた。極東造機という、主に農耕用機械をつくる会社の宣伝部に和馬は勤めている。もうだいぶ以前のことだが、ある晩あしたからまた福井へ出張だといって、ボストンバッグに着

換えのワイシャツや肌着類を詰め込む良人に向って、加代子は訊ねてみた。
「おかしいわねえ。あなたは宣伝部でしょ。それがまるで営業畑の人間みたいに、南は九州から北は北海道の果てまで、一週間もデスクをあけて飛び回るなんて、常識からいってちょっと考えられないわ」
すると彼は手を休めて、頭から押さえ付ける調子で、
「ばかだな、お前には何もわかっちゃいない。勤めた経験がないから無理もないが、おなじ宣伝部でもテレビのコマーシャル・フィルムの係なら、社内で製作プロダクションや広告代理店の連中と会議をしてれば、それで事が済む。だが、おれは全国の販売代理店に配るPR雑誌を編集しているんだぜ、机の前でぼんやり煙草をふかしているわけにはいかないんだ」
とくに四月から新しく〝全国のディーラーめぐり〟と称するページが設けられ、その訪問記事を毎号まとめなければならないのだ、と和馬はいった。写真も自分で撮る。
「でも、その取材に一週間もかかるの」
「ああ。明日からの出張だって、福井から金沢、富山と四日間で回らなければならないんだ」
そういってから彼は、とつぜん癇癪を起したように、
「おい、何を疑っているか知らないが、男の仕事に口をはさまないでくれ。三十一といやア、いいかい、いま会社で一番こき使われる齢なんだ。女房としては、毎月の給料がそっくり銀行に振り込まれているだけで満足すべきじゃないかね。留守中、淋しかったら、おふくろさんのところへ遊びに行ったらいいじゃないか。そのために不便を承知で、わざわざこうして、浦上の家のち

かくに部屋を借りたんだから」

なんとなく言いくるめられた感じで釈然としなかったが、加代子は、「たまには土地土地の味自慢の品をおみやげに買ってきてよ」という言葉をとうとう口に出せずに、黙り込んでしまった。

それにしても、いやいや田舎暮らしに耐えているといわんばかりの、和馬の恩着せがましい言い方は心外だった。実家の母のそばで暮らすのは結婚の条件となっていたことで、和馬も二つ返辞で承知したのだから、いまさらとやかくいわれる筋合はないのである。しかも結婚当初、彼は琴代を実の母のように慕って、勤めの休みの日には互いに招んだり招ばれたりする親密な付き合いをつづけていたのだった。加代子は良人が琴代を大事にしてくれるのを喜ぶ反面、一人っきりの息子から忘れ去られたかたちの和馬の母親の心のうちを思って、気が咎めてならなかった。けれども彼女が、

「ねえ、あなた。たまには二人で鎌倉のお母さんのところへ御機嫌伺いに行かなくちゃ悪いわ」

というと、彼はきまって、

「なアに、あのおふくろに限って、そんな心配は無用だよ。年下の亭主と仲睦まじくやっているところへ行こうものなら、かえって迷惑がられるだけさ。だいいち、女として現役で張り切っている手前、加代子に姑づらするわけにも行かないじゃないか。会いたくなれば、そのうちむこうから来るよ」

といって取り合わなかった。

和馬の母親の忍は、息子の結婚と前後して、それまで内密に付き合っていた二つ年下の写真家

と再婚した。そのとき四十七だったが、加代子は初めて顔を合わせたとき、忍のあまりの若さに度胆を抜かれた。髪を褐色に染め、両の瞼にアイシャドーを塗りつけて、真赤なブレザーを着た忍は、おなじ年輩なのに、くすんだ身なりで年じゅう押入れに頭を突っ込んでいるような琴代を見馴れた目には、一種異様なものに映った。が、大柄で鼻の高い、派手な顔立ちの忍に、そうした装いが似合うのもまた事実であった。背丈があって、整った容貌の和馬は、母親の血を濃く受けついでいる。「ねえ加代子さん。和馬は一人っ子で甘やかされて育ったから、相当な我儘者よ。あたしはこれで肩の荷が下りてやれやれというところだけど、あなたはこれから御苦労なことね。ま、よろしくお願いするわ」といってカラカラと笑う忍を前にして、加代子はずいぶん正直な人だ、水商売は嘘でかためた世界というのが通り相場だが、この人にはそれは当て嵌まらない、この人が二十年もの間銀座でやって来られたのも、こうした気取らない性格の賜物だろうと思った。およそ姑らしくない忍に、彼女は好意を抱いた。

終戦の翌年、台北に生れた池永和馬は、不幸にして父親の顔を知らない。父親はその地の製糖会社に技師として勤めていたが、終戦二ヵ月前に召集され、間もなく無事に復員したが、わずか二ヵ月間の無理が祟ったのか、胸を病んで半年後に二十八歳の生命をあっけなく終らせてしまった。忍はそのとき二十だった。彼女が乳呑み児の和馬を抱き、親戚を頼って東京の土を踏んだのはその翌年の春。焼け残った家の一隅に落ち着き先を見付けると、夜の間だけ子守りの老婆を傭って、忍はさっそく銀座のダンスホールへ働きに出た。そして五年ほど働き通しに働いて、いくらかまとまった金を手にすると、ちいさなバーをひらいた。それからは三年ごとに店の規模を大

きくして、五年前、写真家と結婚したときには、大森にアパートをもつ、銀座の高級クラブのマダムとして、押しも押されぬ地位を築き上げていた。そのクラブはいまも健在だが、忍は鎌倉の写真家の許に腰を落ち着けて、店は支配人にまかせきりにしているらしい。

和馬は口にこそ出さないけれど、将来母親にもしものことがあったとき、大森のアパートとクラブの権利がそっくり自分のものになると踏んで、それを当てにしているようなところがあった。忍が再婚した直後、彼が「おふくろはやり手だが、そこは何といっても女だ、男に狂うと理性を失ってどんな馬鹿なことをしないとも限らないからね、自分名儀の財産はしっかり握っているようにって、忠告して置いたよ」といったことでも、それは窺い知れた。彼女はそのとき、厭な男だなと思った。母親の再婚を快く許してやったにしては、すこし小賢しい気の配りようだ。

そんな油断のならない性格なので、和馬が出張につぐ出張で、こう忙しくちゃ叶わないといくらぼやいても、加代子は頭から信用する気になれない。彼はむしろ、自分が重用されていると信じて、内心得意なのではないか。そんな良人が、加代子の目には滑稽に映った。和馬は私立大学の商学部を出ている。そういう男が雑誌の編集をしていること自体、すでに場違いな印象をあたえずには措かないのに、その上、自分の手で訪問記事を書くというのだから、会社なんていい加減なものだとつくづくあきれざるを得ない。聞けば和馬は、忍が猛烈に働きかけて、無理やり極東造機にもぐり込ませたということだ。当時の重役の一人が、忍のクラブの常連だったからだが、会社のほうでは機械のことはおろか、商学部出のくせにろくに簿記の知識すら持たない、その新入社員の配属先をきめるのに、さぞ苦慮したことだろう。

加代子は、私立の女子短大まで進んだ姉の夏子と異なり、高校を出るとすぐ理容師の免状をとって、新宿のいまは亡い父の店を手伝っていたから、和馬のいうように、会社がどんなところなのか知るわけもなかった。が、いくら勤めた経験がないからといって、姉の話や週刊誌などでおおよその見当はつく。彼女には、どう贔屓目にみても、和馬が有能な社員だとは思えなかった。それでも大過なくその日その日を切り抜けているのは一種の馴れからで、本来なら大切な地方の得意先回りをまかされるような器ではない。彼の取り柄といえば、見てくれのよさと口の巧さぐらいなものだろう。もっとも、こちらから愛想よく持ちかけて販売店主の御機嫌を取り結び、精一杯の提灯記事を書く今度の仕事に、和馬のようなタイプの男はうってつけなのかもしれない。いずれにせよ彼女は、月に一度か二度ある出張や、ふだんの遅い帰宅——酒の匂いをぷんぷんさせているというのならまだしも、疲れたのでサウナにはいってきたといって湯上がりのさっぱりした顔で遅く帰ってくる、そういう日頃の不審な行動から、和馬に女がいるのは確実だと睨んだ。そして、どうやら結婚前に姉が和馬についていったことは本当だった、と思わず唇を噛みしめた。

独身のまま、虎ノ門にある貿易会社に勤めながら琴代といっしょに気儘に暮らしている夏子は、当時妹の結婚相手を見て、

「あれがあんたの趣味なの？　あきれたわ。あんな二枚目ぶった気障な男のどこがいいのよ。中身がからっぽじゃないの。まあこうなったら仕方がないから、子供はしばらく様子を見てからつくることね」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c